

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25284035

研究課題名(和文)映像アーカイブと実地調査による現代舞台芸術の「モビリティ」についての学際的研究

研究課題名(英文)An interdisciplinary study of mobility in the field of contemporary performing arts through the utilization of digital archive and field work

研究代表者

河合 祥一郎(Kawai, Shoichiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40262092

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、過去10年近くにわたって本研究参加者が構築してきた現代舞台芸術の映像デジタルアーカイブをアップデートしつつ最大限に活用し、「移動性=モビリティ」という概念をコアにして、英国、フランス、ドイツ、アメリカ合衆国、日本等における舞台芸術創作の現場で起きていることを実証的に把握し、その事態を理論的に解明するために、グローバル化時代にふさわしい現代舞台芸術の研究手法の再構築を目指すことにあった。参加研究者は、各専門の舞台芸術の分野についての十分な実証研究を推進し、その結果はそれぞれの学術的業績に反映されることになった。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research project was to utilize and keep updating a digital archive for contemporary performing arts that the participating scholars had been building for the last ten years, focusing our attention on the notion of "mobility." We were to grasp what is really happening at the real sites of performing arts in the UK, France, Germany, the US, Japan and elsewhere, through the active usage of the archive, while conducting our own fieldwork, hoping to come up with a new and more productive way to study contemporary performing arts. The project's result is reflected in each participating researcher's academic output during the period.

研究分野：表象文化論・英文学

キーワード：演劇研究 舞台表象 モビリティ パフォーマンス 比較芸術 現代演劇

1. 研究開始当初の背景

研究代表者が平成16年～平成19年及び平成20年～24年に当該科学研究費補助金によって研究代表者が行った研究「現代舞台芸術の映像資料デジタルアーカイブ構築に向けて」及び「現代舞台芸術の映像アーカイブを利用した実践的研究及び教育方法の開発」(ともに基盤研究B)における研究成果として構築された大学内の現代舞台芸術映像アーカイブにおいて、基本的な映像資料は揃っており、研究の出発点としては十分な環境である。

研究分担者のうち、ドゥ・ヴォス、パトリック氏と内野儀氏(申請時)は同じ大学院専攻の表象文化論コースに所属する教員で、従前の二つの研究の研究分担者でもあったため、継続的な研究協力体制を作ることに問題はない。またもう一人の竹内孝宏氏は、同コース出身で、前二つの研究でも、それぞれ研究支援員、研究分担者として研究に参画していただいた。研究の継続性という点からも、氏との協力体制にも、何ら問題ないとする。

研究代表者と分担者の内野儀の両名は演劇評論家としても活動しているだけでなく、演劇創作の現場にもかかることが多い。その意味でも、本研究で得られた知見は、より広い分野で、わが国の舞台芸術の発展に寄与するものと思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、過去10年近くにわたって研究代表者が構築してきた現代舞台芸術の映像デジタルアーカイブをアップデートしつつ最大限に活用し、「移動性=モビリティ」という概念をコアにして、英国、フランス、ドイツ、アメリカ合衆国、日本等における舞台芸術創作の現場で起きていることを実証的に把握し、その事態を理論的に解明するために、グローバル化時代にふさわしい現代舞台芸術の研究手法の再構築を目指すことにある。

本研究は、平成16年～平成19年及び平成20年～24年に当該科学研究費補助金によって研究代表者が行った研究「現代舞台芸術の映像資料デジタルアーカイブ構築に向けて」及び「現代舞台芸術の映像アーカイブを利用した実践的研究及び教育方法の開発」(ともに基盤研究B)における研究成果を踏まえた上で構想されている。

わが国における現代舞台芸術研究が諸外国に比べても遅れているというより、ほとんど手つかずの状態にある。その理由はさまざまに考えられるが、誰でも思いつく理由として、たとえば研究者の数が少ないことや従来的人文諸学における戯曲研究に限定されるテキスト中心主義などがあげられるであろう。しかるに近年、当該科学研究費の細目において「表象芸術」が設定されたことから理解できるように、表象文化についての学術的関心が高まりつつある。ただその場合であ

っても、ビデオやDVDなどの普及によって、あるいは東京国立近代美術館フィルムセンターのような国立のアーカイブができたこともあり、比較的、研究対象作品を入手しやすい映画研究のように、メディアの大衆性も手伝い、近年、研究者数は増加の一途を辿りつつある分野がある一方、現代舞台芸術研究については、そもそも研究者養成のための学科が諸高等教育機関にそれほど多くない上に、ライブの舞台であれ録画メディアであれ、作品に触れる機会があまりに少ないため、事実上、研究状況に大きな変化があるとはいえない。他方、欧米における現代舞台芸術の研究環境が近年、ますます整備されていることから考えても、そのことは明らかである。

そのため研究代表者は、過去10年近くにわたり現代舞台芸術の映像資料デジタルアーカイブの構築に向けての研究活動を行い、わが国における舞台芸術研究の研究環境整備の一端を担ってきた。結果的に見れば、法的問題等があっても、広く開かれたアーカイブにすることはできなかったが、少なくとも研究代表者が所属する大学院においては、研究教育の環境は相当に整ってきたと自負しており、次の段階へと進むべきと判断し、本研究を行うことになった。アーカイブ構築のプロセスで明らかになったのは、このグローバル化の時代にあっても、20世紀的なナショナルな枠組みでの舞台芸術研究がもはや意味を持ち得ないということである。事実、アーティストの国境を越えた移動は日常茶飯事になって久しく、そのことを抜きに、現代舞台芸術研究は成立しないのではない。

一方、演劇研究というディシプリンについては、世界的に見れば、ヨーロッパを中心とした伝統的なドラマ研究に足場を置く演劇研究と、北米発のより広義の「パフォーマンス」をキーワードにする演劇だけを扱うのではないパフォーマンス研究という二つの相互排除的ディシプリンに引き裂かれた状況にある。演劇研究者にとっての緊急の課題は、この異なる伝統を有機的に交渉させつつ、より現実に即したかたちでの演劇研究とその方法論の構築を目指すことにほかならない。しかるに、本課題が問題化するアーティストや演劇的思考の「移動性=モビリティ」は、こうした地理的美学的閉鎖性を具体的に無化している状況があるにもかかわらず、研究者側の対応は大きく遅れているのである。とはいえ、アーティストや演劇的思考の移動がもたらす舞台芸術の地政学的地図はきわめて複雑な様相を呈しており、単独の研究者の力では、その一端であっても明らかにすることはむずかしい。そこで本研究ではそれぞれ異なる領域を専門とする現代舞台芸術研究者が集まり、研究期間に以下のことを明らかにすることを旨とする。

(1) ヨーロッパ、アメリカ大陸、日本を含むアジアの諸地域において、演劇創作におけ

るアーティストの「移動性=モビリティ」というものが、具体的にどのような上演、どのような場に見いだせるのか、数値的な調査を通じた研究を行うことで、理論化の端緒をつかむ。

(2) ヨーロッパ伝統のドラマ・テキストを中心とした演劇研究と北米発のパフォーマンス研究というふたつの研究の場/理論的磁場のなかで、「移動性=モビリティ」という作業仮説的概念を研究の中心に置いてみたときに、現在的行われている諸上演を分節化するためにどのような方法論が有効であると考えられるのかにつき、一定の結論を得る。

(3) 上記二つの研究と同時進行で、演劇的思考の移動の具体例として、「古典の上演」という場を取り上げ、たとえば、シェイクスピアのテキストが、異なる文化圏、異なる言語圏を移動することで、どのような変容を蒙るのか、代表的な事例を通じて、理論的かつ多角的に解析する。

(4) 同じく、「移動性=モビリティ」が可視的にあるいは特徴的に現れるとみなせる「身体」という場を取り上げ、舞台芸術における「身体」というものが、この「移動性=モビリティ」という概念を媒介させたときに、どのようなものとして現象しているかを明らかにする。それは単に、演劇における身体技法の研究を行うという意味ではなく、「身体思想」とでも呼べるものが、インターカルチュラルな、あるいはハイブリッドなパフォーマンスの圏域/場において、どのように具体化/分節化されているかを明らかにすることである。この場合、ダンスとパフォーマンス・アートという身体表現を中心にしたジャンルに特化して研究は行われることになる。

(5) 「移動性=モビリティ」が可視的にあるいは特徴的に現れるとみなせるもうひとつの場として、国際演劇祭を取り上げ、それぞれの演劇祭におけるプログラミング、即ち演劇祭の理論的、思想的アイデンティティを、フィールドワークを通じて明らかにしつつ

その「無意識」部分にも目配せをする必要がある。できれば観客や批評家とのインターアクションまでも視野に入れた、事例研究を行う。

以上のように、本研究は、これまで研究代表者と研究分担者が行ってきた研究の延長線上にありながら、現在の演劇研究の状況から考えて、きわめて斬新で野心的なものだと位置づけられる。もちろんそれは、日本国内的にという意味ではなく、世界的に見てそう言えるということである。現在のグローバルな演劇状況は混迷をきわめており、そのことに対応するかのよう、ナショナルな枠組み、時代的束縛、あるいはジャンルの境界を越えられない、越えようとしない演劇研究は、その役割を終えようとしている。「演劇創造/上演の現場において、いったい何が起きてい

るのか」と言ってしまうと、あまりに素朴な問いであるようだが、同時代の演劇研究の再構築を目指すわたしたちにとっては、そこから始めるしかないと考えているのである。

5年間という短い研究期間にわたしたちが実施できる研究内容には自ずと限界があることは承知している。しかし、これまでわたしたちのそれぞれが培ってきた演劇研究の知見を十全に生かすことで、上記(1)~(5)までの研究目的を果たすことは十分可能であると判断している。

3. 研究の方法

5年間の研究期間のうち、当初は研究参加者間で研究対象とテーマを絞るブレインストーミング的研究会を定期的に行いつつ、通常の意味での資料収集と舞台芸術デジタルアーカイブへの映像資料追加と平行して、できるだけ数多くの事例研究を共同で進めていく。研究期間後半には、今後の展開を考え、それまでの研究成果を自己評価しつつ、また、積極的、多角的にアウトプットをすることで、学会にとどまらない演劇の現場を含む外部からの評価を得、より問題意識を集約した形で事例研究をさらに進めていく。

平成25年度

まずは、研究代表者が平成16年~平成19年及び平成20年~24年に当該科学研究費補助金によって研究代表者が行った研究「現代舞台芸術の映像資料デジタルアーカイブ構築に向けて」及び「現代舞台芸術の映像アーカイブを利用した実践的研究及び教育方法の開発」(ともに基盤研究B)における研究成果として構築された大学内の現代舞台芸術映像アーカイブにつき、そこに収められた映像資料についての知見を研究参加者間で共有することから本研究を始めたい。これまでは数多くの資料を集めることにアーカイブ構築の目的は集約されてきたが、今後は、本研究のテーマに基づいた収集方針が立てられるべきであるからである。

つづいて、本研究における「移動性=モビリティ」という主題につき、すでにある資料を吟味した上で、必要な活字資料や映像資料のさらなる収集を開始する。担当は以下の通り。英国関係、中でもシェイクスピアを中心とした資料については河合祥一郎、フランス・ドイツを中心とした大陸ヨーロッパ関係の資料についてはドゥ・ヴォス、パトリック、アメリカ合衆国を中心とした南北アメリカの資料を内野儀、さらに日本と東アジアを中心とした資料を竹内孝宏が責任を持って収集に当たる。演劇史関係、演劇理論関係、さらには戯曲テキストにかかわる基本文献、あるいは、身体論、批評理論、ニューメディア論、あるいはパフォーマンス理論といった理論的な領野でのさらなる基本文献の収集が行われる予定である(参加者全員が担当)。と同時に、それぞれの研究者が得意とするジャンルや分野の資料収集も、本研究のテーマ

にしたがって、以下のような分担で実施するシェイクスピアの上演（河合祥一郎）、現代のダンス関係（ドゥヴォス、パトリック）、日米現代演劇とパフォーマンス・アート（内野儀）、日米大衆演劇（含む、ミュージカル、竹内孝宏）。

一方、フィールドワークとしての国際演劇祭調査については、スケジュール調整がむずかしいため、今年度に限らず研究期間中のどこかの時点で、ということで計画しているが、継続的に行っていく予定である。対象となるのは、英国のエジンバラ演劇祭やフランスのアヴィニオン演劇祭、あるいは東京のフェスティバル・トーキョー、香港並びにシンガポールの国際芸術祭といった大きな規模の国際演劇祭がまずは調査対象の候補となる。しかし、「移動性=モビリティ」をキーワードにした場合、招聘作品が単に陳列的に並ぶだけではないより野心的な演劇祭も調査対象とする必要がある。というのも、そうした小さな規模のフェスティバルにおいてこそ、「移動性=モビリティ」がより可視的であることを、研究参加者が経験的に理解しているからである。

その場合、具体的にいえば、ベルギーのブリュッセルで行われるクンステン・フェスティバルヴァル・デザール、パリのフェスティバル・ドートンヌ、ウィーンのウィーン芸術週間（における舞台芸術部門）といった大陸ヨーロッパのより小さな規模の舞台芸術祭が対象とならざるを得ない。というのも、今のところ、公的助成金にささえられたフェスティバル文化がもっとも盛んなのは大陸ヨーロッパであり、少なくともアーティストの「移動性=モビリティ」が自覚的に問題化されているのは、そうしたフェスティバルだと考えられるからである。実際のフェスティバル調査・研究においては、単に上演作品を見るだけでなく、関係者へのインタビュー等が当然ながら、前提とされている。

研究内容にはある程度の継続性があるため、これまで通りの研究参加者による研究会を月一回程度の定例で開催する予定で、そこでそれぞれの分担する研究の進捗状況についての情報交換や収集した資料についての共同討議、さらに以降の研究方法の具体的な方向性等について話し合う。また、本研究においては、これまで以上に対象領域が広がっており、ドイツや東アジアといった研究参加者が必ずしも専門としない文化圏、言語圏が、その研究対象に含まれているため、以下のような専門家に適宜、助言をいただく予定であるが、それは今年度から当然、実施する。ドイツ演劇については、元フランクフルト大学教授のハンス=ティース・レーマン氏、ブラジル及び南アメリカ諸地域における舞台芸術については、サンパウロ・カトリック大学教授のクリスティン・グレイナー氏、東アジア諸地域の舞台芸術についてはシンガポール南洋大学准教授のC.J.W. ワンリン氏であ

る。その他、必要に応じて、各地における舞台芸術の専門家（含む、制作者やアーティスト）からの助言も得ていく予定である。

こうした研究プロセスを経て、今年度末には、本研究において以下のことが達成されていることが目標となる。

（１）各研究参加者がすでに所蔵している映像資料を理解し、その問題点を共有すると同時に、「移動性=モビリティ」をキーワードにしつつ、学界的なアウトプットを考慮した上で、既存の映像資料の具体的な分析作業を始めること。

（２）各研究参加者が専門とする現代舞台芸術の諸分野につき、既存の映像資料デジタルアーカイブを拡充する上で必要な作品や作家を、「移動性=モビリティ」をキーワードにして選定し、本研究に資するアーカイブ拡充の具体的な作業に入ること。

（３）できるだけ早い時期に、今年度とそれ以降に対象とすべき国際演劇祭を選び、十分な準備期間と当事者と連絡を行った上で、フィールドワークを実施すること。

（４）「古典の上演」、「身体」という二つの場については、研究参加者の間の共有できる理論的前提を確保した上で、研究会等の活動を通じて、学術論文としてアウトプットできるような準備を整えること。

初年度については、以上のような目的が設定されているが、機会があれば、研究参加者は、ジャーナリスティックな文章によっても、本研究を通じてられた知見を、具体的な演劇の現場、あるいはより広く一般社会へと、還元していくことを考えている。

平成26年度以降

本研究における「移動性=モビリティ」という主題につき、すでにある資料を吟味した上で、必要な活字資料や映像資料のさらなる収集を継続する。また、具体的な目的については上記（１）～（４）を、より着実なかたちで年度ごとに達成できるようにしていく。平成26年度以降にあっては、当然ながら、（４）にとどまることなく、その時点での研究成果を踏まえ、国際学会等において、本研究の成果をできるだけ頻繁に発信していく必要がある。また、学術論文も書かれてしかるべきである。

4. 研究成果

各年度における研究成果を以下に記す。

平成25年度

以下の4点を達成目標に掲げ、ほぼ順調に研究は進捗した。

（１）各研究参加者がすでに所蔵している映像資料を理解し、その問題点を共有すると同時に、「移動性=モビリティ」をキーワードにしつつ、学界的なアウトプットを考慮した上で、既存の映像資料の具体的な分析作業を始めること。

（２）各研究参加者が専門とする現代舞台芸術の諸分野につき、既存の映像資料デジタル

アーカイブを拡充する上で必要な作品や作家を、「移動性=モビリティ」をキーワードにして選定し、本研究に資するアーカイブ拡充の具体的な作業に入ること。

(3)できるだけ早い時期に、当該年度とそれ以降に対象とすべき国際演劇祭を選び、十分な準備期間を経て、当事者との連絡を行った上で、実地調査を行うこと。

(4)「古典の上演」、「身体」という二つの場については、研究参加者の間の共有できる理論的前提を確保した上で、研究会等の活動を通じて、国際学会発表や学術論文としてアウトプットできるような準備を整えること。

ただし、(3)については、諸般の事情により、実地調査については、一回の調査をのぞき、準備段階にとどまることになった。

平成26年度・27年度

当該年度は、昨年度と同様の4点(上記参照)を達成目標に掲げ、ほぼ順調に研究は進捗した。

平成28年度

継続的に映像アーカイブを構築するために、PC機器等の老朽化によるアップデートを行った。

本研究における「移動性=モビリティ」という主題につき、既にある資料を吟味した上で、必要な活字資料や映像資料のさらなる収集を継続した。フィールドワークとしての国際演劇祭調査については、当該年度は諸般の事情で予定よりも低調だった。ただし、ドゥ・ヴォス、パトリックが、年度後半、研究休暇によってヨーロッパに滞在し、帰国後、その成果報告等を行った。

当該年度もまた、過去三年間同様、研究参加者による研究会を月一回程度の定例で開催した。その成果は十分に共有されているという理解であり、今後はそれをどう学界及び社会に還元するかを考えることになった。

平成29年度

継続的・安定的映像アーカイブの構築・利用のため、PC機器等の老朽化によるアップデートを随時実施した。また、本研究における「移動性=モビリティ」という主題につき、すでにある資料を吟味した上で、必要な活字資料や映像資料のさらなる収集を継続。また、基本文献の収集も継続した。フィールドワークとしての国際演劇祭調査については、内野がベルリンのダンス・イン・オーガストでの資料収集を行った。

各年度の研究成果については、以下に記すさまざまな媒体あるいは学会における発表において、必ずしも明示的ではないにせよ、継続的に示されているとわたしたちは考えているので、参照されたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

1. 内野儀、観光客の演劇 神里雄大の時代、新潮、査読無、115巻3号、2018、217-223
2. 竹内孝宏、公共劇場としての大衆演劇：三吉演芸場に対する公的助成をめぐって、青山総合文化政策学、査読有、9巻2号、2017、95-110
3. 河合祥一郎、日本におけるシェイクスピア上演、學士會会報、査読無、923、2017、53-57
4. 河合祥一郎、言葉のリズムの再確認、悲劇喜劇、査読無、三月号、2017、16-18
5. 河合祥一郎、落語と一人芝居とシェイクスピアと、悲劇喜劇、査読無、1月号、2017、19-21
6. DE VOS Patrick、Le butoh de Hijikata et sa part bataillienne、Art Press2、査読無、42、2016、53-59
7. 竹内孝宏、公共劇場としての大衆演劇 明石ほんまち三白館の劇場マネジメント、青山総合文化政策学、査読有、9巻1号、2016、17-55
8. SHOICHIRO, Kawai、"The hours come back!" : Significant Inconsistencies in *The Comedy of Errors*、Shakespeare Studies、査読有、13、2016、43-59
9. 内野儀、舞台芸術の地殻変動 移動性(モビリティ)と滞在(レジデンシー)の現場から、新潮、査読無、113巻2号、2016、160-173
10. 内野儀、方法論としてのニュー・ドラマ トゥルギー 共同討議の余白に、表象、査読無、10、2016、181-189
11. 河合祥一郎、オリザの芝居の precision (精確さ/緻密さ) 文藝別冊 Kawade 夢ムック、査読無、別冊、2015、133-139
12. 河合祥一郎、Much Ado About Nothing/Noting における "noting" の構造、Shakespeare Journal、査読有、1号、2015、38-46
13. 内野儀、飴屋法水のこと 『いりくちでくち』に参加して、新潮、査読無、112巻2号、2015、252-253
14. パトリック・ドゥ・ヴォス、Buthocirc(s) から Rebutoh へ、Artlet、査読無、42、2014、n.p.
15. 竹内孝宏、現代の大衆演劇における「大衆性」の構造 浅草木馬館での上演における舞踊ショー使用曲の調査報告、およびその分析と考察、青山総合文化政策学、査読有、6巻2号、2014、31-61
16. UCHINO, Tadashi、What about Machines? Performing "J-type" Technology in Japan's Performance Culture、Dance Research Journal of Korea、査読無、71.3.、2013、189-215
17. 内野儀、媒介(メディアム)としての日本 舞台芸術のモビリティを高めるために、viewpoint、査読無、63、2013、8-10
18. 内野儀、演劇、文藝年鑑、査読無、2013

年版、113-115

19. 内野儀、現代英米演劇の研究、『英語年鑑』、査読無、2013年版、2013、30-34
20. UCHINO, Tadashi、Cody Poulton's "A Beggar's Art: Scripting Modernity in Japanese Drama, 1900-1930", Journal of Japanese Studies、査読無、39.2.、2013、414-417

〔学会発表〕(計10件)

1. 河合祥一郎、戯曲を新たに翻訳する意義とは？シェイクスピアの場合、現代演劇の場合、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業主催「近代日本の人文学と東アジア文化圏 東アジアにおける人文学の危機と再生」シンポジウム、2018
2. UCHINO, Tadashi、Theatre of the Tourist in the Age of Mobility: Kamisato Yudai and Choy Ka Fai, Donald Keene Center for Japanese Culture, Columbia University、2018
3. UCHINO, Tadashi、An Introduction to "The Theater and the Theatrical: Reconsidering American 'Drama' in the Age of Trump"、アメリカ学会第51回年次大会、2017
4. UCHINO, Tadashi、Simultaneous Turns in Globality: Performative and Social Turns in the New Millennium, or Theorizing/Historicizing Okada Toshiki's Welcome to European Festival Cultures (revised)、Art and Society in Contemporary Japan: The Theatre of Okada Toshiki、トリアー大学(ドイツ)、2016
5. UCHINO, Tadashi、After the Quake: Some Reflections on Immediate Performative Responses after 3.11.、ベルリン自由大学国際演劇研究センター<Interweaving Performance Cultures>、2016
6. 河合祥一郎、共作者としてのシェイクスピア Sir Thomas Moreをめぐって、日本英文学会全国大会(立正大学)、2015
7. UCHINO, Tadashi、Simultaneous Turns in Globality: Performative and Social Turns in the New Millennium, or Theorizing/Historicizing Okada Toshiki's Welcome to European Festival Cultures、日本英文学会全国大会(立正大学)、2015
8. 内野儀、役者評判記からブログまで 日本の劇評、劇評の日本、北京戯曲評論学会、2014
9. UCHINO, Tadashi、Imagining New "Asian" (Post)Human Sciences: The Resistible Fall of Humanities in Japan and Elsewhere?、International Symposium, Celebrating the 10th Anniversary of the School,

"Humanities and the Social Sciences and Asia"・シンガポール南洋工科大学、2014

10. UCHINO, Tadashi、"Database Animals" and the Avant-garde: Materializing Transnational, Transient Subjectivities in Posthumanity, Center for East Asian Studies, The University of Chicago、2014

〔図書〕(計9件)

1. 河合祥一郎(訳) 白水社、ジェイムズ・シャピロ『「リア王」の時代 1606年のシェイクスピア』、2018、544頁。
2. 河合祥一郎(訳) 角川文庫、シェイクスピア『新訳 まちがいの喜劇』、2017、132頁
3. 河合祥一郎(訳) 光文社、ソポクレス『オイディプス王』、2017、166頁
4. ドゥ・ヴォス、パトリック(監訳) 慶應義塾大学出版会、シルヴィア・ヌ・パジェス著『欲望と誤解の舞踏 フランスが熱狂した日本のアヴァンギャルド』、2017、384頁
5. 河合祥一郎、新潮社、シェイクスピアの正体、2016、342頁
6. 河合祥一郎、中央公論社、シェイクスピア 人生劇場の達人、2016、242頁
7. 内野儀、東京大学出版会、「J演劇」の場所 トランスナショナルな移動性(モビリティ)へ、2016、440頁
8. 河合祥一郎、筑摩書房、謎解き『ハムレット』 名作のあかし、2016、272頁
9. 河合祥一郎、NHK出版、シェイクスピアハムレット なるようになればよい、2014、112頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

河合 祥一郎 (KAWAI, Shoichiro)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：4 0 2 6 2 0 9 2

(2)研究分担者

ドゥ・ヴォス パトリック (DE VOS, Patrick)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：0 0 2 4 2 0 3 2

内野 儀 (UCHINO, Tadashi)
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：4 0 1 6 8 7 1 1

竹内 孝宏 (TAKEUCHI, Takahiro)
青山学院大学・総合文化政策学部・教授
研究者番号：6 0 3 0 2 8 1 6